

マッツ・グスタフソン / 植田正治
マン・レイ / マッツ・グスタフソン
ー マッツと名匠写真家たちのコラボレーション

マッツ・グスタフソンは1951年にスウェーデンに生まれた。1980年にはNYに拠点を移し、『VOGUE』や『Harper's BAZAAR』といったファッショ誌には欠かせない人物となり、近年では、2017年に『Dior by Mats Gustafson』が上梓されるなど、いまなお第一線で活躍し続けている。考えてみれば、Diorのようなメゾン・ブランドのブックがイラストレーションによって作られるというのは興味深いことだ。なぜならファッションを語るメディアはイラストレーションではなく写真が用いられることがほとんどなのだから。もう少し細かい話をするならば、ファッショ誌は1910年代ごろからイラストに替わって写真で語られはじめ、50年代には、ファッショ誌にイラストの居場所はほとんどなくなってしまった。この歴史を踏まえると、マッツがこれだけファッショの世界で起用され続けていることは、大きな謎といえるのだ。

しかし、私たちは誰しもが、そのことを謎だとは考えていない。それだけマッツのファッショ・イラストレーションは、核心をついていると感じさせる何かがある。

ここに描かれているのは、間違いなくDiorやYohji YamamotoあるいはCOMME des GARÇONSだと感じるができる。この感覚は、マッツが描く「石」や「木」といった自然をモチーフにした作品群を前にするとさらに強まる。そこには「石」や「木」に宿る本質とでもいべき何かがつり込んでいる。

さて、本展覧会は写真作品とマッツの水彩画を並べて展示しようという試みであるから、写真についても少し触れておきたい。準備の際、MA2 Galleryさんが植田正治の「カコ」とマッツの「木」の組み合わせを見せると、マッツは「かこちゃんがTreeの立ち方を真似ているみたいだ」と返したそうだ。ギャラリーのオーナー松原氏もこれには感激し「マッツは描く立場でフォルムの共通点やストーリーを見ている」と、マッツの作品制作の考え方を指摘している。とあるインタビューでマッツは水彩画について「線を引くと、それを変更することはできません」¹とその難しさを語っていたが、このフォルムを捉える一瞬の芸術という点で、写真家もまた同じ運命の中で格闘してきた。ただ、写しとるだけではなく、いかにその本質をフォルムに落としこむか、可視化させていくか。同じ緊張感でこのふたつの芸術は繋がっている。

ここにある作品たちが私たちを引きつけてやまない理由は、どこかで彼らが可視化してみせる、そのモノの本質を、私たちも「それ」と知っているためかもしれない。まさに「石」とはそういうものだ、と感じながらも、決して同じように可視化することはできない心の絵を、マッツだけが見事に捉えてくれている。しかも、「石」が持つ強さや厳しさ、硬さという側面ではなく、自然という私たちよりも遥かに大きな存在が醸し出す、ものすごく優しい部分を引き出すようなやり方で。だからこそ、私たちはマッツの絵を愛さずにいられないのである。

写真評論 / リヴォラ
粟生田弓

1 CFHILL 編『Mats Gustafson』展覧会カタログ (2019) より

ZEIT-FOTO Collection とは、

1978年創立の国内初のコマーシャル・フォト・ギャラリー、ツアイト・フォト・サロンの創業者である故石原悦郎が集めてきたオリジナル・プリント群。その多くは、石原が直接作家から買い付けてきたプリントである。主に、70年代後半から80年代半ば頃に仕入れられたもので古く、作家自身ないし作家の指示のもとでプリントしたものと、希少価値の高いプリントからなる。